

1. 「発掘調査だより」について（調査速報）

白鳥が戻ってきて、冬の足音が近づいてきました。今月も発掘調査だよりをお届けいたします。

10 月は D・E 区の調査を行いました（写真 1）。D 区では、石器を製作していた跡が見つかりました。これまで村北遺跡では剥片石器は石鏃（矢じり）1 点のみと少なかったのですが、この発見で縄文人が石器を製作しながら生活していたことが分かりました（写真 2）。

今月は B 区の調査を進めていきます。村北遺跡の縄文人の生活を解明する新たな発見が期待されます。

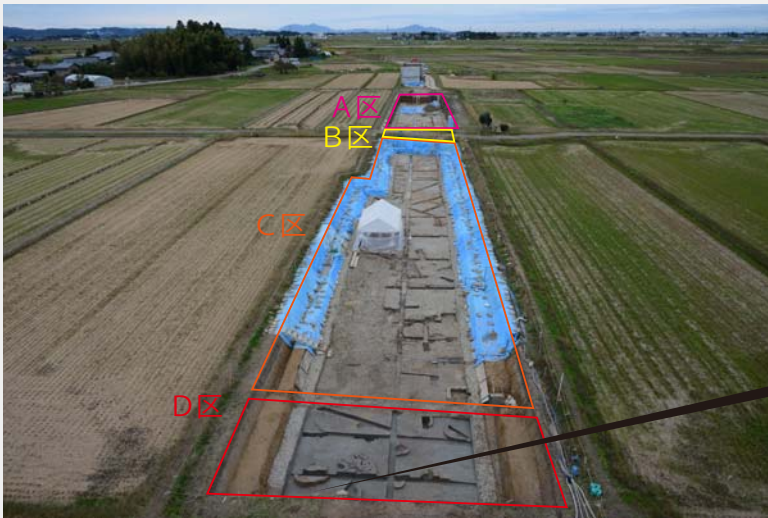


写真 1 D 区的位置（東から）



写真 2 D 区で出土した石器剥片

2. 調査のようす（発掘！ 竪穴住居）

10 月号では A 区で発見した炉跡についてお伝えしました。その後、調査を進めた結果、炉跡を中心として直径約 6 m の範囲に地面を少しくぼめた痕跡が見つかりました。この範囲が竪穴住居だったことが分かりました（写真 3）。

竪穴住居は村北遺跡に縄文人がいなくなった後に埋もれてしまいました。その後約 4,000 年間にこの地を何度か地震が襲ったと考えられます。そのため当時はきれいな円形だったこの竪穴住居は、大きく形を変えてしまったようです（写真 3）。

竪穴住居の埋土層も複雑に入り組んでいます。人が生活するために、住居は床を平らにすることが一般的ですが、地震によって地層が乱れたために、激しい凹凸が見られ、地層がちぎれている様子も観察されました（写真 4）。

炉跡については、先月に引き続きどうやって作られてどのように使用されたか、その後の地震が炉にどのような影響を与えたのか調べました。

10 月号でもお伝えしたように、この炉は土器を埋めてからまわりをこぶし大の軽石で囲



写真 3 竪穴住居 全景（北から）

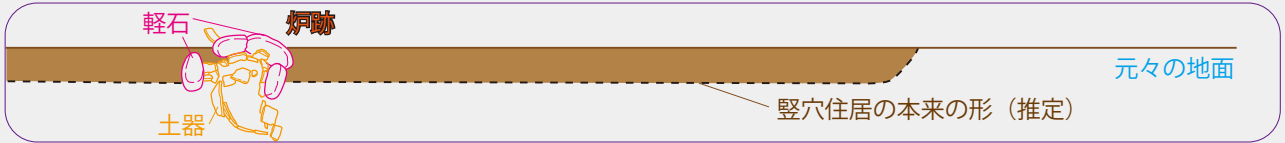


写真4 竪穴住居の地層断面（北から）

んでいます。断面を観察した結果、この炉が地震によって壊されるまでの様子が見えてきました（写真5）。

炉に設置された土器の中には、炭がたくさん入った黒い土がつまっていました。土器の外側には炭は少なく、まわりの土が焼けた痕跡も確認できませんでした。土器の中の黒い土を取り除くと、こぶし大くらいの石が入っていました。（写真6）この石は黒土の途中に入っていますが、焼けていません。火を受ける炉の中にあつたとしては不自然です。何のために石を入れたのか、今後考えていきたいと思ひます。

炉跡の形を上から観察してみると、地震によって形がゆがんだ状況が見えてきました。縄文人がこの炉を作る時には円形を意識したと考えられますが、出土した状況を見ると、まわりの軽石や土器が北西や南西方向からの力を受けゆがんだ様子が確認できます（写真7）。このことから、地震による力のかかった向きが分かり、過去に起きた地震の規模や被害状況を知ることができます。

3. これからの課題

竪穴住居の発見は、村北遺跡に縄文人が一定期間暮らしていた証拠になります。しかし、その詳細な時期は明らかにできていません。今後、炉跡から出土した炭を年代測定し、炉跡の詳細な時期を探る予定です。



写真5 炉跡の断面（北から）

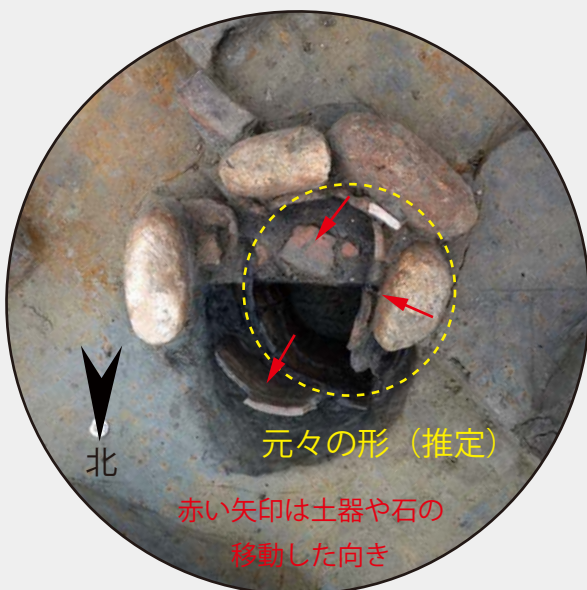


写真7 地震による炉跡の破壊状況



写真6 土器の中に入っていた石（北東から）